社会科

社会がわかり、社会にかかわる児童を育てる指導の工夫

1　研究主題について

(1)　主題設定の理由

本校社会科部では、教科の目標である「グローバル化する国際社会に主体的に生きる平和で民主的な国家及び社会の形成者に必要な公民としての資質・能力の基礎」の育成を目指して研究を進めている。この資質・能力を身に付けた児童像を、社会がわかり、社会にかかわる姿と捉えている。

本校社会科部が考える「社会がわかる」姿とは、社会的事象の仕組みと意味を理解している姿である。小学校社会科では、どの小単元においてもまずこの姿を確実に具現化できるように、指導を工夫する必要がある。「社会がわかる」具体的な児童の姿の例としては、第３学年の小単元「火事からくらしを守る」において、それまで調べてきた消防署職員の諸活動について、思考ツールを活用して分類することで、消防署などの関係機関が緊急時に対処する体制をとっていることや防止に努めているという社会的事象の仕組みを理解することができた。そして、関係機関や地域の人々の諸活動が、わたしたちのくらしに果たす役割を問う発問をすることで、地域の安全が守られているという社会的事象の仕組みの意味を理解することができた。

本校社会科部が考える「社会にかかわる」姿とは、社会に見られる問題について考え、解決しようとしている姿である。そのためには、児童が社会に見られる問題（本校社会科部ではこれを社会に見られる課題と同義とする）を把握し、よりよい社会の発展のために多角的に社会の在り方を考えたり、問題の解決に向けて社会への関わり方を選択・判断したりすることで、解決策の質を高められるようにすることが大切である。例えば、第６学年の小単元「わたしたちのくらしを豊かにする政治」では、さいたま市内で起こった内水氾濫による水害問題を把握し、その原因を分析し、必要な情報を調査し、解決策を考えた。よりよい解決策にするために、協働的に改善点を指摘し合いながら提案文書を完成させて市役所に提案した。

これまでの研究を振り返ると、「社会がわかり、社会にかかわる」児童を育てるために、主に二つの手立てを講じてきたことが明らかとなった。一つ目は社会的事象の見方・考え方を働かせるための指導の工夫である。その成果として、位置や空間的な広がり（空間的な視点）、時期や時間の経過（時間的な視点）、事象や人々の相互関係（相互関係的な視点）の三つの視点から一つを選んで学習課題を設定したり、発問したりすることで、事実と事実を関連付けて考えることができ、社会的事象の仕組みと意味を理解することに効果的であることが分かってきた。また、

二つ目は学習過程の構造化である。その成果として、問題解決のサイクルを２度取り入れることで、学習内容が整理され、社会的事象の仕組みと意味を理解することに効果的であることが分かってきた。

研究構想図

一方、課題もあった。上の二つの手立てはいずれも主に「社会がわかる」ために講じてきたものであり、「社会がわかる」だけでなく「社会にかかわる」ための手立てについて検証することが必要である。「社会がわかる」姿と「社会にかかわる姿」の二つは段階や順序で捉えるものではなく、「社会がわかる」姿が「社会にかかわる」姿に内包されているという関係性である。児童がいずれ実際に社会を形成する大人になることを考えると、小学校段階として社会の在るべき姿を考えたり、自分ができることを考えたり、問題の解決のために提案したり参加したりすることは不可欠なことである。そして、そのために社会的事象の仕組みと意味を理解することが必要である。つまり、「社会にかかわる」ために必要なのが「社会がわかる」ことなのである。よって、いずれ社会にかかわることを見据えた「社会がわかる」ための手立てや、小単元の中で直接的に「社会にかかわる」ための手立てを講じていくことが必要であると考える。

以上のことを基に、本校社会科部では、本研究主題「社会がわかり、社会にかかわる児童を育てる指導の工夫」を設定し、研究を進めていく。

(2)　社会科で目指す児童像

本校社会科部では具体的に次のような「社会がわかり、社会にかかわる児童を育てる」ことを目指していく。

社会がわかる児童: 社会的事象の仕組みと意味を理解している児童
社会にかかわる児童 ：社会に見られる問題について考え、解決しようとしている児童

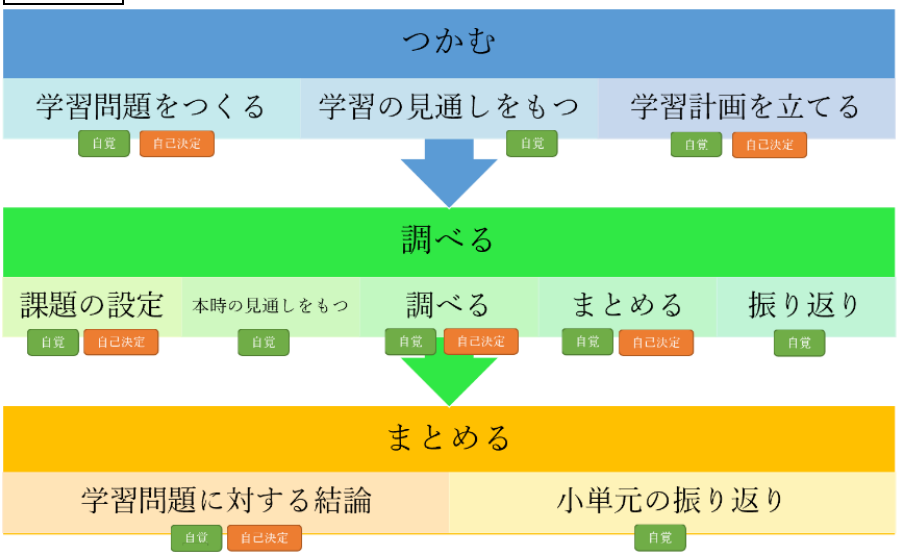
(3)　本校研究主題との関わり

本校研究主題「学びをつくる～子供たちが自覚と自己決定をくりかえすためには～」では、研究の視点として、「自覚と自己決定をくりかえすことで学びをつくることができるようにする。」と考え、研究を進めてきた。そして、目指す児童の具体的な姿として、「進んで問題を見いだし、よりよい解決に向けてねばり強くやり抜く子」と示した。自覚と自己決定をくりかえし学びをつくることが、社会に出る際に、進んで問題を見いだし、よりよい解決に向けてねばり強くやり抜く姿となると考えている。

自覚とは、今の自分を捉えることができるようになることである。今までの自分や、これからの自分と比べることや、他者と比べることで自覚できるようになる。社会科の学習では、学習問題に関して調査対象や調査方法を予想したり、学習計画を立てたり、学習問題に対する結論を考えたりするような場面で活用することができる。例えば、第４学年「和紙づくりのさかんな小川町」の学習では、学習問題に関して調査対象や調査方法を予想する際に、既習の川越市の学習を生かして、二つのまちに共通して尽力する役所の人と地域の人との協力関係に目を向けることができる。これは、今までの自分と比べて自覚している姿といえる。また、第３学年「事故や事件からくらしを守る」では、学習したことを基に、地域や自分自身の安全を守るためにできることを選択・判断する。これは、これからの自分と比べて自覚している姿であるといえる。さらに、調べる過程やまとめる過程において、協働的な学習を適宜取り入れることで、他者の学び方やまとめ方を共有することで、他者と比べて自覚している姿であるいえる。このように社会科においては、様々な場面で児童の自覚を促すことができる。

自己決定とは、根拠をもって選択・決断することができるようになることである。様々な瞬間や場面を設定することで、自己決定できるようになる。社会科の学習では、学習計画などの学び方を決める場面や、学習問題に対する結論を決定する場面・社会への関わりを選択・判断する場面で活用することができる。例えば、第５学年「水産業の盛んな地域」では、既習の米づくりの学習を生かして、学習計画を立て、そこから学びたいことや学びたいことの順番・学び方を自己決定できる場面を設けることができる。また、第４学年「自然災害からくらしを守る」では、学習したことを基に、自然災害に対して自分たちができることを、自己決定できる場面を設けることができる。このように社会科おいては、

図１



様々な場面で児童が自己決定できる場面を設けることができる。

この自覚と自己決定をくりかえすことで、学びをつくることができるようになる。例えば、図１のように調べる過程では、振り返りの際に、「何をどのように調べたか」「何を調べられていないか」などを自覚することで、次に学ぶべき課題を自己決定することができる。また、小単元のつながりで見ると、まとめる過程の小単元の振り返りにおける自覚が、次の小単元のつかむ過程の自覚につながり、学習問題を自己決定できるようになる。

これからのことから、本校研究主題「学びをつくる～子供たちが自覚と自己決定をくりかえすためには～」は、社会科の研究主題「社会がわかり、社会にかかわる児童の育成」に通ずるといえる。

２　主題にせまるための研究内容及び方法

(1) 研究の視点１について

【視点１】学習内容に応じた学習過程を取り入れることで、社会がわかり、社会にかかわることができる。

社会科における問題解決的な学習は、つかむ過程、調べる過程、まとめる過程を１サイクルとした学習過程で進めている。この学習過程を基本としつつ、学習指導要領の内容や教材の特性、教師の意図などに応じて以下の①、②の学習過程を組むことで社会がわかり、社会にかかわる児童の育成に迫ることができると考える（文中の表参照）。

つかむ過程	：社会的事象から問いを見いだし、学習問題を導き出す過程
調べる過程	：学習問題の解決のための見通し（学習課題）をもち、解決していく過程
まとめる過程	：これまでの学習を整理し、学習問題の結論を導き出す過程

①手立て１　社会がわかる学習過程

（ア）「つかむ」重視型

「つかむ」重視型は、社会的事象の仕組みと意味が学習内容となる場合に効果的な学習過程である。

つかむ①、調べる①、まとめる①において社会的事象の仕組みを理解する。つかむ②で社会的事象の意味に迫る問いを見いだし、調べる②、まとめる②において社会的事象の意味を理解する。社会的事象の意味を理解することがこの学習過程の目的である。つまり、つかむ②で学習問題Ⅱを導き出すまでがつかむ過程であると言える。このような捉え方からこの学習過程を「つかむ」重視型としている（文中の表参照）。

重視する学習過程	実際の学習過程	学習内容
つかむ	つかむ①	学習問題Ⅰ 社会的事象の仕組み
	調べる①	
	まとめる①	
	つかむ②	学習問題Ⅱ 社会的事象の意味
調べる	調べる②	
まとめる	まとめる②	

また、社会的事象の仕組みと意味が学習内容となるのは、学習指導要領の内容が以下の

ような場合である。

第４学年(2)人々の健康や生活環境を支える事業「水はどこから」　※赤は仕組み、青は意味 ア　次のような知識及び技能を身に付けること。 (ｱ)飲料水，電気，ガスを供給する事業は，安全で安定的に供給できるよう進められていることや，地域の人々の健康な生活の維持と向上に役立っていることを理解すること。
第５学年(3)我が国の工業生産「くらしを支える工業生産」　※赤は仕組み、青は意味 ア　次のような知識及び技能を身に付けること。 (ｱ)我が国では様々な工業生産が行われていることや，国土には工業の盛んな地域が広がっていること及び工業製品は国民生活の向上に重要な役割を果たしていることを理解すること。

（イ）「調べる」重視型

「調べる」重視型は、社会的事象の仕組みが学習内容となる場合に効果的な学習過程である。

重視する学習過程	実際の学習過程	学習内容
つかむ	つかむ	大きな学習問題
調べる	つかむ①	小さな学習問題Ⅰ
	調べる①	
	まとめる①	
	つかむ②	小さな学習問題Ⅱ ※Ⅲ以降もあり得る
	調べる②	
	まとめる②	
まとめる	まとめる	大きな学習問題の結論

つかむにおいて学習問題（大きな学習問題）を導き出し、それを解決するために必要な学習問題（小さな学習問題）を一つずつ追究する。社会的事象の仕組みを理解することがこの学習過程の目的である。つまり、２サイクルの場合はつかむ①～まとめる②までが、学習問題を調べる過程であると言える。このような捉え方からこの学習過程を「調べる」重視型とする（文中の表参照）。具体的に社会的事象の仕組みが学習内容となるのは、学習指導要領の内容が以下のような場合である。

第３学年(4)市の様子の移り変わり「市の様子の移り変わり」　※赤は仕組みの例 ア　次のような知識及び技能を身に付けること。 (ｱ)市や人々の生活の様子は，時間の経過に伴い，移り変わってきたことを理解すること。 ※交通、公共施設、土地利用、人口　など
第５学年(3)我が国の工業生産「自動車をつくる工業」　※赤は仕組みの例 ア　次のような知識及び技能を身に付けること。 (ｲ)工業生産に関わる人々は，消費者の需要や社会の変化に対応し，優れた製品を生産するよう様々な工夫や努力をして，工業生産を支えていることを理解すること。 ※自動車の製造、自動車の輸出、自動車のこれから　など

②手立て２　社会にかかわる学習過程

社会にかかわる学習過程は、社会的事象の仕組みと意味を理解しながら、社会に見られる

問題の解決を目指す学習過程である。社会に見られる問題を把握し、その原因や既存の解決策を分析した上で、解決のための解決策をつくり、社会に対して提案・参加する。この学習過程を進める上で欠かせないのが、提案・参加する対象である。これが、提案・参加するための目的となる（文中の表参照）。具体的に社会に「かかわる」ことを学習内容とするのは、学習指導要領の内容が以下のような場合である。

問題把握	：社会に見られる問題を把握し、社会の在り方を考える過程
問題分析	：問題の原因や既存の解決策などを分析し、学習問題を導き出す過程
意思決定	：問題の解決のための解決策をつくる過程
提案・参加	：解決策を提案したり、社会での実際の活動に参加したりする過程

第４学年(3)自然災害から人々を守る活動「自然災害からくらしを守る」 ア　次のような知識及び技能を身に付けること。 (ｱ)地域の関係機関や人々は，自然災害に対し，様々な協力をして対処してきたことや，今後想定される災害に対し，様々な備えをしていることを理解すること。
第６学年(1)我が国の政治の働き「わたしたちのくらしを豊かにする政治」 ア　次のような知識及び技能を身に付けること。 (ｲ) 国や地方公共団体の政治は，国民主権の考え方の下，国民生活の安定と向上を図る大切な働きをしていることを理解すること。

(2)研究の視点２について

【視点２】「わかる」と「かかわる」ために効果的な学習活動を取り入れることで、社会がわかり、社会にかかわることができる。

社会科における思考の方法とは、どのような違いや共通点があるかなどと比較・分類したり、総合したり、どのような役割を果たしているかなどと、地域の人々や国民の生活と関連付けたりすることで、考えたり選択・判断したりすることである。また、複数の立場や意見を踏まえて考えるという多角的に考えることも学年が上がるにつれて徐々にできるようになることが求められている。下の表のように、思考の方法を教師の意図に応じて以下の①、②の学習活動を取り入れることで、社会がわかり、社会にかかわる児童の育成に迫ることができると考える。

思考の方法	教師の意図
比較・分類	２つ以上の社会的事象を比較・分類し、相違点や共通点（類似点）を見いだすことで、事実を把握させる。
総合	学習してきたことを全体的に見て、これまで分かったことを整理することで、１単位時間や小単元における社会的事象の仕組みや意味を捉えさせる。
関連付け	社会的事象をつながりのあるものとして考えることで、様々なつながりの中で社会的事象が成り立っていることを捉えさせる。
多角的に考える	複数の立場や意見を踏まえて考えることで、社会的事象について幅広い視野で、深く捉えさせる。

①手立て１　思考ツールの活用

思考の方法	使用する思考ツール
比較・分類	Ｘ・Ｙチャート、ベン図
総合	ステップチャート、マップ図
関連付け	イメージマップ、関連・関係図
多角的に考える	イメージマップ、価値判断チャート

思考ツールを活用することで、考えていることやその考えに至るまでのプロセスを表出しやすくすることができる。例えば、ベン図を活用して諸活動を分類し、相違点や共通点（類似点）を見いだしたり、関連・関係図を活用して社会的事象同士のつながりを表出し、関連付けて考えたりすることができる（文中の表参照）。

このように思考の方法に応じた思考ツールを活用することが、「わかる」と「かかわる」ために効果的であると考える。

②手立て２　児童の思考を促す発問の展開

児童の思考を促す発問は、児童の思考の流れに沿って資料を提示したり、学習活動のつながりを円滑に接続したりするなど学習を展開していく上で必要不可欠なものである。本校社会科研究室では教師の意図に応じて、児童の思考を促す発問を下の表のように４種類に分けて展開している。

発問の種類	教師の意図
①思考を焦点化する発問	社会的事象の相違点や共通点（類似点）に着目するように問うことで、考えることを方向付ける。
②思考を拡散する発問	それまで調べてきた社会的事象に対して、別の側面やその他の社会的事象に着目するように問うことで、新たな方向に考えを広げさせる。
③思考を揺さぶる発問	それまで捉えてきた社会的事象の仕組みや事実などに対して、働きや役割などの意味や価値について問い直すことで、改めて社会的事象について深く考えさせる。
④思考を整理する発問	それまで調べてきた社会的事象について総括して問うことで、社会的事象の仕組みや意味を整理し、捉えさせる。

そこで、思考の方法を導き出す際に用いる児童の思考を促す発問を分類すると、下の表のように位置付けることができる。

思考の方法	使用する児童の思考を促す発問
比較・分類	①思考を焦点化する発問
総合	④思考を整理する発問
関連付け	①思考を焦点化する発問　②思考を拡散する発問　③思考を揺さぶる発問
多角的に考える	②思考を拡散する発問　　③思考を揺さぶる発問

このように思考の方法に応じた児童の思考を促す発問をすることが、「わかる」と「かかわる」のために効果的であると考える。

（鈴木　一徳）

学びをつくる姿を目指すことに重点をおいた実践

３　実践とその考察

実践例２　－第６学年
「わたしたちの国の政治のしくみと選挙」を通して－

(1)　研究主題との関連

本実践では、研究の視点２「『わかる』と『かかわる』の質を高める学習活動を取り入れることで、社会がわかり、社会にかかわることができる。」の①学習内容に応じた思考ツール、②児童の思考を促す発問から手立てを講じ、実践を通して検証を試みていく。

(2)　実践の考察

【視点２①について】

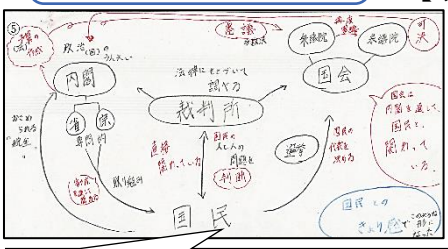
「わかる」と「かかわる」ための効果的な学習活動として思考ツールを活用することで、社会がわかり、かかわることができると考える。そこで、学習問題に対する結論を考える場面、学習したことを基によりよい社会を考える場面で関係図を書く活動を取り入れた。

＜目指す姿＞
国会、内閣、裁判所と国民との関わりを考え、表現する姿

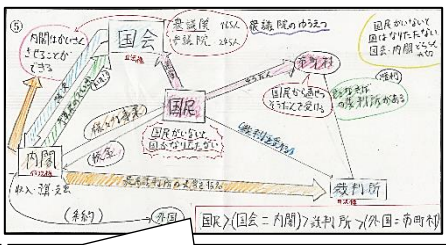
＜使用する思考ツール＞
関係図
（各立場の相互関係を捉えることに適した思考ツール）

学習問題に対する結論を考える場面では、学習問題「わたしたちの国は、どのような政治のしくみなのか」に対する結論を導き出すために、これまでの学習を基に、関係図で表す活動を行った。関係図をつくる際には、①これまで学習の中で登場した国会・内閣・裁判所・国民（わたしたち）の４者の立場を入れること②政治のしくみにおいて大切だと思う立場を大きく書くこと③政治のしくみにおいて大切だと思う働きを大きく書くことを指導した。

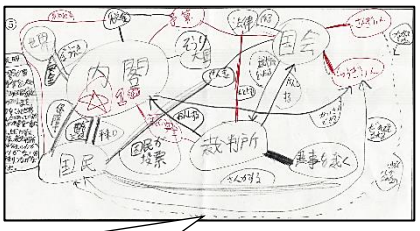
【学習問題に対する結論を考える場面での児童の作成した関係図】



この児童は、国民との距離感でこのような関係図を作成した。聞き取り調査をした際に、裁判所の働きを学ぶことで私達の権利を守ってくれている裁判所が、国会や内閣より身近に感じたと話していた。国会については、内閣を通して国民と関わっているという記述が見られ、間接的な存在として認識していることが分かる。



この児童は、国民を最も重要なものと考えた上で、国会・内閣どちらも大切であると考えた。聞き取り調査をした際に、法律の作成・実行を通して、国民の生活に深く関わっていると話していた。また、市町村や外国といった学習において登場した他の立場も関係図に取り入れており、広い視野で相互関係を理解していることが分かる。



この児童は、内閣を最も重要なものと考えた。記述には、行政として実際に国民生活と関わっていることや、条約の締結などで外国とも関わっていることが大切な理由として挙げられている。また、予算の作成・決定や、２院制に分かれていること、納税などを重要な働きとして赤で記述している。

このように関係図に表すことで、各立場の相互関係を捉え、国会、内閣、裁判所と国民との関わりを考え、表現することができた。また、それぞれ学習したことを自分なりの判断基準で価値付けることもできた。さらに、関係図を友達と交流することで、それぞれの立場の働きと国民との関係に対する考えの相違を理解することができた。

【視点２②について】

「わかる」と「かかわる」ための効果的な学習活動として児童の思考を促す発問をすることで、社会がわかり、かかわることができると考える。そこで、国の政治のしくみに見られる問題を取り上げ、**問い直し**をすることで、学習したことを基によりよい社会を考える場面を取り入れた。

＜目指す姿＞

我が国の政治のしくみを捉え、日本国憲法の基本的な考え方に着目し、問いを見いだしている。

＜使用する発問＞

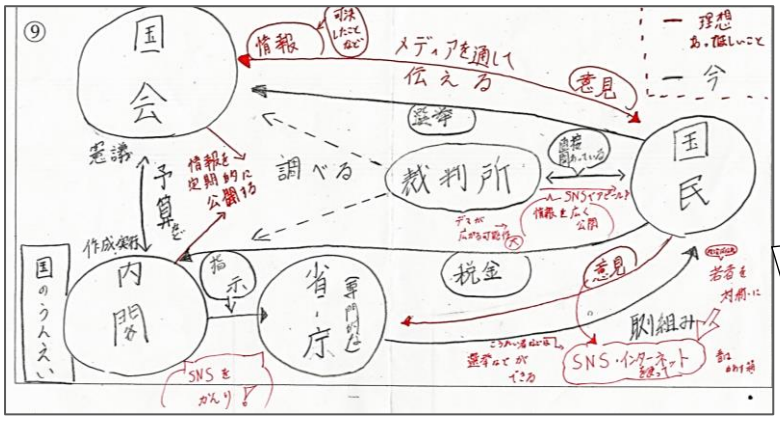
③揺さぶる「本当によい？」

（それまで捉えてきた社会的事象の仕組みや事実などに対して、働きや役割などの意味や価値について問い直すことで、改めて社会的事象について深く考えさえる。）

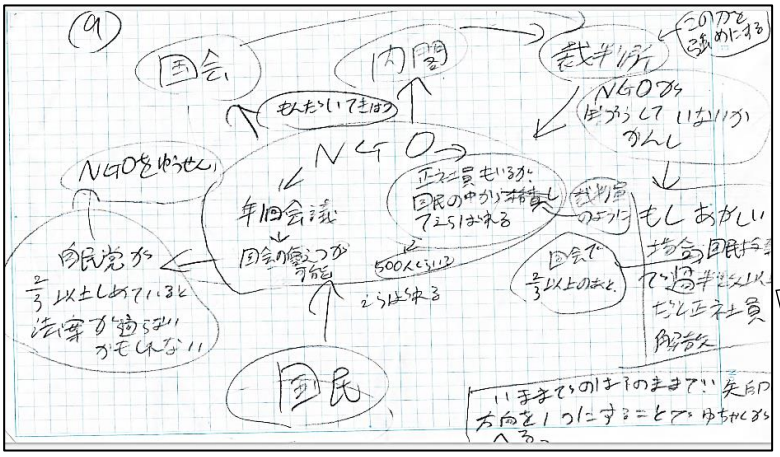
学習したことを基に、よりよい社会を考える場面では、国の政治のしくみに見られる問題を取り上げ、教師が「本当によい？」と**問い直し**、児童が話合いを行った。話合いでは、三権分立は権力がバランスよく保たれていることに意味があるので、今の政治のしくみは改善できる所があると考える児童や、憲法に国会は国権の最高機関とあり、日本はこの政治のしくみによってバランスを保っているのだから今の政治のしくみはよいと考える児童に分かれた。こうした話合いから、新たな視点をもたせる発問をすることで、自分の問いとして自分事に捉えることができたと考える。

そして、話合いだけでは解決ができないので、新しい課題として「わたしたちの国の政治のしくみは、本当に国民にとってよいしくみなのか」を設定した。そこで、よりよい政治のしくみを関係図で表す活動を行った。関係図をつくる際に、昔の日本の政治のしくみや諸外国の政治のしくみを調べる活動を取り入れた。

【学習したことを基に、よりよい社会を考える場面での児童の関係図】



この児童は、諸外国の政治のしくみの中には、インターネットを利用している場合もあることを知り、日本でもSNS などによって国民の意見をより広く聞くことができるのではないかと考えることができた。また、学習問題に対する結論では、国会の大きさが小さかったが、友達との交流を通じて、国会の力の大きさを見直している。



この児童は、国民にとってよりよい政治を目指すには、新しい立場としてNGO を取り入れるべきだと考えた。これは、前年度にこれからの工業生産を考える際に、NGO の方をゲストティーチャーに招いた際の経験からである。また、別の記述では、自分の考えを実現するために、憲法４１条・９６条を改正し、三権を公平にすることや、NGO にも発議の権利をもたせるなど憲法改正にまで考えが及んでいた。

(3)　実践の成果

この実践を通して、社会がわかり、かかわることができる児童が育ったと考える。その要因の１つ目は、その時間に児童に思考させたい内容を整理して、その内容に適した思考ツールを使ったことが挙げられる。これにより、相互関係を捉え、それぞれの立場と国民との関係を考え、表現することができた。２つ目は、新たな視点をもたせるために、児童の思考を揺さぶる発問をしたことである。これにより、よりよい社会を考えるという将来的に社会にかかわれるようにする活動に取り組むことができた。

（村知　直人）

学びをつくる姿を目指すことに重点をおいた実践

３　実践とその考察

実践例１　－第４学年
「都道府県の様子とわたしたちの埼玉県」を通して－

(1)　研究主題との関連

本実践では、研究の視点１「学習内容に応じた学習過程を取り入れることで、社会がわかり、社会にかかわることができる。」の①社会がわかる学習過程の（イ）「調べる」重視型、視点２「『わかる』と『かかわる』ために効果的な学習活動を取り入れることで、社会がわかり、社会にかかわることができる。」の①思考ツールの活用から手立てを講じ、実践を通して検証を試みていく。

(2)　実践の考察

【視点１①（イ）について】

社会がわかるためには、社会がわかる学習過程で学習を展開していく必要がある。そこで、本小単元では、「調べる」重視型の学習過程を取り入れ、社会的事象の仕組みを確実に理解することとともに、**意欲の継続**を図ることをねらい、学習を展開した。

＜目指す姿＞
埼玉県の様子を捉え、地理的環境の特色を考え、表現する姿

←

＜取り入れる学習過程＞
①社会がわかる学習過程
（イ）「調べる」重視型

【本小単元の学習過程】

学習内容
大きな学習問題「埼玉県とはどのようなところなのだろうか。」
小さな学習問題Ⅰ「土地の使われ方」
小さな学習問題Ⅱ「交通」
小さな学習問題Ⅲ「建物と人口」
小さな学習問題Ⅳ「産業」
学習問題に対する結論

【児童の小さな学習問題Ⅱのまとめ】

2022年5月10日

課
埼玉県内の交通（線路、車道）の様子は、どうなっているのでしょうか。
調
「立体地図を見て分かったこと」
・東側の交通が多い。
・土地が低いところが、交通が多い。
・高速道路は色々な所を通っている。
・西の方は道路が少ない。
・道路が作れない？お金がない？必要ない？
・山の方は結構雪が降るから人が住まない？だから、山側は道路はあまりいらない。
・東の方は人口が多い市がある。
・西の方は少ない。
まとめるポイント
交通　人口　土地の様子
ま
埼玉県内の交通の様子は、東方は人口が多く交通網が発達している。また、西の方は人口があまり多くなく、交通網は発達していない。

視点１の①社会がわかる学習過程の「調べる」重視型によって学習を展開したことによって、小さな学習問題に対する結論を毎時間具体的な文章で導き出していくことで、社会的事象の仕組みを捉えていった。この児童は立体地図と交通網 OHP シートを重ね合わせて調べたことを、プレゼンテーションソフトを使って、地形と交通とを関連付けて考えたことをまとめて文章に表現している。次の小さな学習問題Ⅲで調べていく「建物と人口」のことについても関連付けて考えている記述が見られる。振り返りを通して、**意欲の継続**も図ることができた。

【視点２②について】

社会がわかるためには、児童の思考を拡散したり、揺さぶったりするような児童の思考を促す発問をすることで社会的事象を比較したり、関連付けたりすることが必要である。そこで、本小単元の調べる過程において下の表のような発問構成の下、学習を展開していった。

＜目指す姿＞
埼玉県の様子を捉え、地理的環境の特色を考え、表現する姿

←

＜取り入れる学習活動＞
②思考を促す発問の展開

時	調べること	主な資料	焦思考を焦点化する発問　拡思考を拡散する発問 揺思考を揺さぶる発問　整思考を整理する発問
3	土地の使われ方	・さいたまの立体地図	焦：土地の高さはどうなっているのでしょうか？ 拡：西側、南側、北側はどうでしょうか？ 整:県内はどんな地形をしているのでしょうか？など
4	交通	・さいたまの立体地図 ・県内交通網 OHP シート 	焦:どのあたりに線路や道路が集中しているのでしょうか？ 揺:交通網なんて時代が経つに連れて勝手に発達するものではないのでしょうか？ 焦:交通網の発展と何かつながりがあることがあるのでしょうか？　など
5	建物と人口	・さいたまの立体地図 ・県内人口分布トレーシングペーパー	焦：どのあたりが建物や人口が多いのでしょうか？ 焦：地形や交通とつながりがあるのでしょうか？ 整:県内の建物や人口はどのような特徴があるのでしょうか？　など
6	産業	・さいたまの立体地図 ・県内農業・工業分布トレーシングペーパー	焦:どのあたりで農作物や工業製品が多く作られているのでしょうか？ 揺:工業製品なんてどこでも作ることができるのではないでしょうか？ 焦:どんなこととつながりがあるのでしょうか？など

【調べる過程の発問構成表例】

視点２の②思考を促す発問の展開によって、資料提示のみでは思考することができない県全体の地形や主な産業の分布、交通網や主な都市の位置などに着目して、事象と事象のつながりを考えることができ、県の様子を捉え、地理的環境の特色を考え、表現することができた。

(3)　実践の成果

この実践を通して、社会がわかることができたと考える。その要因として、社会がわかる学習過程で学習を展開したことで、小さな学習問題に対する結論を毎時間具体的な文章で導き出していくことができ、社会的事象の仕組みを理解することに有効であったことが挙げられる。また、思考ツールの活用により既習を生かして学習計画を立てることができ、見通しをもって学習が展開でき、社会的事象の仕組みを理解することに有効であったことも挙げられる。　（鈴木　一徳）

４　研究のまとめと今後の課題

(1)　研究の成果

【視点１】学習内容に応じた学習過程を取り入れることで、社会がわかり、社会にかかわることができる。

〇社会がわかる学習過程について

・問題を「調べる」重視型は、社会的事象の仕組みを計画的に理解することができることが明らかとなった。

・問題を「つかむ」重視型は、社会的事象の意味を理解するために、発問での問い直しのみでは捉えることができない事象を取り扱う際に効果的であることが明らかとなった。

〇社会にかかわる学習過程について

・社会にかかわる学習過程は、自分事として捉えられるような社会に見られる問題を取り上げて、提案・参加を進めていくことで、多くの児童の社会参画の意識を育むことができることが明らかとなってきた。

【視点２】「わかる」と「かかわる」の質を高める学習活動を取り入れることで、社会がわかり、社会にかかわることができる。

〇学習内容に応じた思考ツールの活用について

・ベン図を活用して類似性と独自性に着目することで、既習を生かして学習の見通しをもつ際に効果的であることが明らかとなった。

・関連図、関係図を活用して事象のつながりに着目することで、それまで調べ、考えてきたことを整理する際に効果的であることが明らかとなった。

〇児童の思考を促す発問について

・「〇〇とつながりがあるの？」という思考を拡散する発問をして、事象同士の関連性に着目することで、根拠を基に関連付けをすることができることが明らかになってきた。

・「本当にそれでよいのか」という思考を揺さぶる発問をして、それまでの学習を問い直すことで、社会がわかり、社会にかかわることにつながることが明らかになってきた。

(2) 今後の課題

〇発問は、教材（資料）提示と一体と考え、教材研究を進めていくために今後も研究していく必要がある。

〇社会がわかる学習過程では、２サイクルにする価値があるのかどうか発問を駆使し、問い直すことで目標が達成できるのかをよく見極め、検討した上で実践する必要がある。

〇社会にかかわる学習過程は、児童にとって自分事として捉えられない社会に見られる問題では、具体的な解決策を考えることができないため、児童の実態に応じた教材を設定する必要がある。

（鈴木　一徳）